

※ 赤字は生徒の解答例、青色は参考事項

第3部 1章 ユーラシア大交流圏の成立

授業テーマ 6-6 十字軍から得るべき教訓とは？（探究）（No.36）

2年（ ）組（ ）番 氏名（ ）

◎探究テーマ

11世紀末にヨーロッパ人が引き起こした十字軍（英語はで Crusades、イスラーム側からは単に「フランク」（西ヨーロッパ人の総称）の侵入と呼ばれる）は、西ヨーロッパ世界・イスラーム世界を巻き込み、大きな運動へと発展していく。さまざまな思惑が重なったこの運動は断続的に 200 年余り続くことになる。現代でも、「十字軍」やそれに対抗する「聖戦」は欧米諸国・イスラーム諸国との関係に大きな影を落としている。十字軍とは何だったのか、また、われわれは十字軍から何を学ぶべきなのか。

1 十字軍のイメージ 【15分】グループ分け5分 → イメージの共有 10分

(1) グループ分け 4人グループに分け、役割を割り振る。グループ数は偶数に調整する。

あなたのグループは（ ）班（ ）

役割1（発表）役割2（司会）役割3（タブレット）役割4（書記）

名前（ ）名前（ ）名前（ ）名前（ ）

(2) 十字軍をどうイメージするか？

当時のヨーロッパ人・イスラーム諸国の人々が考えるであろうイメージを予想してみよう。また、自分自身の感じるイメージはどうか考えてみよう。

ヨーロッパ	イスラーム	自分
<ul style="list-style-type: none"> ・聖地の奪回 ・領土や富の獲得のための行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパ人の侵略 ・キリスト教徒に対する聖戦 	<ul style="list-style-type: none"> ・両宗教の対立の原因 ・諸地域の交流の促進

グループで自分の考えるイメージを共有させる。

(3) 現代の十字軍のイメージ（資料1）

ヨーロッパ人は比較的肯定的に、イスラーム側は否定的に捉えている。

十字軍のイメージの一例を確認し、現代でも考えるべきテーマであることを確認する。

2 グループワーク1

(1) 十字軍の目的と実際 【31分】読み取り 15分 → 伝達3分×2 → 解説 10分

西欧側とイスラーム側双方の十字軍に対する考えや記録を資料から読み取り、さまざまな角度から十字軍の目的やそれに対する反応について考察し、イメージを具体化しよう。

・Aグループ 十字軍の目的は何か？（資料2）

建前は聖地奪回とそれによる贖罪を動機としていたが、

実際には、イスラーム世界の富や所領、経済的利益を求めて行動していた。

4人グループをA・Bの2グループに分け、設問に従って資料を読み取る。

発表・司会の2名が席を移動し、お互いにA→B、B→Aに対し資料の説明と問いの答えを伝達する。

その後、班に戻って共有する。

Bグループ 十字軍の実態とイスラーム側の反応はどうか？（資料3）

第1回十字軍では、聖地の占領後、フランクはムスリムや正教会の信者を虐殺し略奪した。

アイユーブ朝のサラディンが聖地を回復すると、キリスト教徒に憎悪を生み出させないために、略奪や流血をできる限り避けた。

十字軍を経て、イスラーム側はキリスト教徒に対する不信を強め、現代にも影響を残している。

第1時ここまで

3 グループワーク2

(1) 西欧とイスラームの2人の王

それでは十字軍の歴史は、西欧世界とイスラーム世界に不信や不寛容を生み出しただけなのか？サラディンやフリードリヒ2世の事例を基に十字軍にから得られる教訓を考えよう。

① サラディン【10分】

サラディンはイスラーム世界だけに留まらず、当時のヨーロッパ世界でも理想的な君主として高く評価されている。前時の資料3-3、3-4を参考に、サラディンの特筆すべき点を挙げてみよう。

イエルサレム入城後、キリスト教徒への報復を禁じたこと。

キリスト教徒にも聖地巡礼を認めたこと。

キリスト教徒の子どもを母親の元へ帰している。

敵対するキリスト教徒に対しても、その考えや感情を尊重し、憎悪を増幅させないよう配慮していることを確認する。ただし、盟約を幾度となく保護にしたルノー＝ド＝シャティオンをみずから処刑する事例などを紹介し、単なる平和主義者であるというイメージにならないよう留意する。(映画『キングダム・オブ・ヘヴン』より聖地解放の場面を視聴し、聖地解放時の交渉とイエルサレムに対するサラディンの想いを想像する。)

② フリードリヒ2世とアル＝カーミル【21分】プロフィール5分 → 資料読解10分 → 質問・共有3分×2
空欄に正しい語を入れ、2人のプロフィールを確認しよう

<p>フリードリヒ2世</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シュタウフェン朝の〔 神聖ローマ 〕皇帝 ・シチリア島のパレルモで育ち、シチリア王とドイツ王を兼任し、1220年に皇帝に就任 ・教皇と対立し破門を宣告される ・破門中の第〔 5 〕回十字軍で聖地を回復 ・彼とその子の死後、シュタウフェン朝が断絶し、ドイツは皇帝不在の「 大空位時代 」となる。 	<p>アル＝カーミル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アイユーブ朝の第5代〔 スルタン 〕(世俗君主＝皇帝) ・サラディンの甥にあたり、サラディンの死後、彼の兄弟や子の間で内紛が続いていた。 ・フリードリヒ2世に聖地を引き渡す ・政策に対する不満から〔 マムルーク 〕朝によるアイユーブ朝の打倒につながる。
--	---

教科書や資料集などを参考に、空欄を埋め、両者のプロフィールについて確認する。

2人の人物像や置かれている状況は？

<p>フリードリヒ2世側 (Aグループ・資料4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際的なシチリア島で育ち、アラビア語を話す ・十字軍を延期しようとしたことで教皇から破門されている ・アル＝カーミルとの個人的な友好関係から、講和協定を結び、聖地を平和的に回復 	<p>アル＝カーミル側 (Bグループ・資料5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・弟アル＝アッザムとの争いの最中 ・イスラームに理解あるフリードリヒ2世と個人的友好関係を築いている ・弟の管理するイエルサレムを材料にフリードリヒ2世と交渉しようとしている。
--	--

AグループからBグループへ質問：資料4の波線部の関係とはどのようなものか？

フリードリヒ2世がムスリムに対する偏見をもっていなかったため、アル＝カーミルはフリードリヒ2世を信頼できる人物と判断し、書簡や贈り物のやり取りを行っていたこと。

BグループからAグループへ質問：資料5の波線部フリードリヒ2世の同じ考えとはどのようなものか？

聖地回復(十字軍)は宗教的理由から行うのではなく、政治的問題である。

破門を解除し、教皇代理権を放棄しないために聖地を取り戻す必要があるということ。

4人グループをA・Bの2グループに分け、資料を読み取りまとめる。

前回と同様に司会・発表の2名が移動し質問

残ったタブレット・書記の2名が質問に対して回答する。その後班に戻って共有

(2) この3者の事例から、我々は価値観の大きく異なる他者とどのように関わっていくべきなのか？

予想される解答例

【8分】検討5分 → 共有3分

対立する意見や価値観の異なる人に対しても、敵対し憎みすぎてはいけない。

異なる価値観や考えについて幅広く理解する懐の広さを持ち、自分の考えを絶対視しない。

現実的な判断をし、自分たちの利益も考えながら譲れるところは譲ることも必要である。

グループで話し合い、解答をロイロノートで共有する。グローバル化が進む今日、他者への理解・寛容の重要性が重要となること、また、自分たちの価値観を絶対視せず、現実的な譲歩が必要である。について確認する。

<memo>

他グループの解答で参考になる部分を記録させる。

十字軍の教訓 資料

資料 I



資料 2-1 (参考文献① P16、20~21 の一部)

クレルモン教会(宗教)会議では、次のような条項が討議された。

「誰でもあれ名誉や金銭の入手のためではなく、ただ信心のみのために神の教会を解放せんとエルサレムへ出発した者には、その旅はすべての贖罪のためとみなさるべし」というものである。……

会議も終り近い 11 月 27 日、教皇は会議場の司教聖堂を出て、郊外の広場で群衆を前に演説をした。これが世に第 1 回十字軍の召集演説として知られるものである。それは以下のような内容であった。

「トルコ人の侵入により東方のキリスト教徒が苦しんでおり、救援の必要がある。だから、相互の不正な内戦の代わりにトルコ人に対する正義の戦いを行うべきである。この遠征に参加したのものには、贖宥があたえられる。この戦いは神の先導者である。」……

さて、クレルモン教会会議に関して、もう一つ述べておくことがある。それは十字の印である。そもそも「十字軍」という言葉は、その参加者の衣服に付けた十字の印に起源を持っている。十字の印を衣服に付けることを「十字を取る」と言い、この表現は十字軍参加を示す定式となる。……十字軍に参加を表明した以上は、同時にその任務は必ず果たさねばならないのだが、その誓いを形であらわしたものが、十字の印だったのである。

(A) 下線部は具体的にどのような状況を指すか？

セルジューク朝がビザンツ帝国を圧迫している。

(B) 「贖罪」・「贖宥」の意味を調べてみよう。

罪をあがなう、生前に犯した罪について軽減してもらうこと。

資料 2-2 (参考文献② P124 の一部)

キリスト教徒の巡礼者は、自分たちがパレスチナで粗末に扱われていることに気づきはじめた。といっても、打たれたり、拷問されたり、殺されたりしたわけではない。……問題はそういうことではなかった。それはむしろ、彼らが絶えずちょっとした屈辱感を嘗めさせられたり、嫌がらせを受けたりして、二流の存在と感じさせられていたということだ。……

こうした事情で、ヨーロッパに帰った巡礼者には悪口と不平の種が山ほどあった。だが、絢爛豪華な東方世界についての話の種にも事欠かなかった。その目で見た豪壮な邸宅、庶民までもが身につけていた絹やサテンの衣服、素晴らしい食べ物、香辛料、香水、黄金……これらの見聞譚は聞く者の心に怒りと羨望をかき立てた。

(A) 資料から判断すると、十字軍以前に聖地巡礼は可能であったか？

可能

(B) ヨーロッパ人が、下線部のように相反する感情になったのはなぜか？

聖地で自由に振舞えない怒りと、東方の富に対する憧れの両方があったから。

資料 2-3 (参考文献① P26~28 の一部)

ウルバヌス 2 世の召集に応え、1096 年の夏から秋にかけて、諸侯たちの率いる十字軍が出発する。この第 1 回十字軍には国王は誰も参加しなかった。……そのため、個々の諸侯が単独にあるいは幾人かのグループで出発することになった。……もちろん、第 1 回十字軍に宗教的動機はあった。あったればこそ、他の戦争とは区別され、後世、「十字軍」という特別の名前で呼ばれることになったのである。しかし、第 1 回十字軍は決して純粋な宗教的動機から行われたわけでもなければ、参加者の誰もがひたすら聖地をめざしたわけでもない。それは、実際に参加した諸侯を見れば、容易にわかることである。……

同じく北フランスから参加した 3 人の兄弟がいる。……長男のウスターシュ 3 世は父から豊かなブローニュ伯領を継承して、現状に満足していたと思われる。彼は十字軍に余り熱心ではなく、経過中の行動もはっきりし

ない。エルサレム陥落後は早々に帰郷したらしい。ゴドフロワ・ド・ブイヨン¹は次男であったが、母方の所領である下ロレーヌを継承した。しかし、領地経営ははかばかしくなく、下ロレーヌからは権力も富も引き出すことはなかったようである。彼の十字軍の参加動機は主としてこのような所領経営の行き詰まりであったと考えられる。出発に際しては、ユダヤ人を恐喝し、また所領を売却したり質入^{しういれ}したりして、資金を獲得した。エルサレム占領後、彼は最初のエルサレムの君主に選出されることになる。三男のボードワンになると、もはや分配されるべき所領もなく、教会に入れられていた。しかし、聖職者として一生を送ることに満足できなかつたとみえ、還俗^{げんぞく}して兄ゴドフロワのもとに仕えていたようである。そのようなボードワンにとって、十字軍は魅力ある機会だったはずである。実際、彼は当方でエデッサ伯領を建設し、さらに初代のエルサレム王になる。

(A) 第1回十字軍が聖地に建国した国家は何か？

イェルサレム王国

(B) 下線部について、諸侯はどんな動機で十字軍に参加したのか？

出身地では得られなかった所領や君主の地位を獲得するため。

資料2-4 (参考文献③ P382~384の一部)

この騎士たちは、乗船の用意怠りなく、このアドリア海の都に着いたとき、ドージェのダンドロ^{※1}に温かく迎えられた。……ダンドロは十字架の旗のもと、自身遠征に加わるつもりだと告げる。しかしながら、出発する前、騎士たちに約束の金額を請求する。そして彼らが支払いの延期を申し入れると、彼はひとつの条件をつけて受諾する。すなわち、遠征をザダルの港の征服から始めること。そこはこの何年来、アドリア海におけるヴェネツィアの競争相手なのであった。……ザダルはローマの忠実なしもべ、ハンガリー王に属するキリスト教徒の町だからである。しかし、彼らに選択の余地はない。ドージェはこのささやかな奉仕か、契約金の即時支払いかを迫るのだ。ザダルはこうして1202年11月、攻撃され、そして略奪された。だが、ヴェネツィア人はもっと高いところをねらっている。今や彼らは、コンスタンティノーブルに、回り道して、西洋側に友好的な若い君主を皇帝につけるよう、遠征の首脳を説得しにかかる。もし、ドージェの最終目標がずばり、彼の共和国に地中海の制海権を与えることだったならば、彼の話術はしたたかなものだ。ギリシア人の「異端者ども」に対する騎士たちの不信感を利用し、ビザンツの無限の富をほのめかして、もしルーム^{※2}の都を掌握すれば、ムスリムに対するずっと有効な攻撃を仕掛けることができると、首脳たちに説明したからである。その結果、雄弁が勝を占める。1203年6月、ヴェネツィアの船隊はコンスタンティノーブルの前面に達した。……1204年4月、わずか一週間の戦闘の後、町は城門を破られ、3日のあいだ、略奪と殺人に委ねられる。イコン、彫像、万巻の書、無数の芸術品など、ギリシアとビザンツの文明の証拠が強奪あるいは破壊され、何千もの住民がのどをえぐられた。

※1 ドージェとはヴェネツィアの総督の称号、当時の総督はエンリコ＝ダンドロ。

※2 ローマ（ビザンツ帝国）のこと。

(A) これは何回目の十字軍についての資料か？

第4回十字軍

(B) 下線部について、異端者どもとはどのような宗教の人々か？

ギリシア正教徒（ビザンツ人）

資料 3-1 (参考文献② P124 の一部)

アラブ側の記録をみるかぎり、当時のムスリムは……フランジ*との戦争をイスラーム世界とキリスト教世界の叙事詩的な闘争とみなしていなかったようだ。……二つの文明の衝突どころか、ムスリムにとって十字軍は……文明に……降りかかってきた災難でしかなかった。それは一つには、彼らの目に映るフランジには文明のかけらも認められなかったからだ。ウサーム・イブン・ムンキズというアラブの貴公子はフランジを評して、まるで「けだものようだ。勇気と戦う熱意には優れているが、それ以外に優れた点は何もない。動物が体力と攻撃力で優れているのと同様である」と述べている。

※アラブ世界の人々による西欧の人々を示す呼称。フランクと同じ。

資料 3-2 (参考文献③ P21、109~110 の一部)

フランクが 40 日間の攻囲の果てに聖都を奪ったのは、史実の上ではイスラム暦 492 年シャアバーン月の 22 日金曜日、西暦でいえば、1099 年 7 月 15 日のことであった。国を追われてきた人びとは今もそのことを話すたびに体は震え、目は一点を見つめて、あたかも、鎧を着た金髪の武者が路上にあふれ、剣を振るって男女、子どものかつ切り、家や寺院を荒らし回っているのを、まだ目の前で見ているようだ。2 日後、虐殺が終わった時に、城壁内にムスリムの姿は 1 人もなかった。中には混乱にまぎれ、寄せ手が押し破った城門をくぐり抜け、脱出した者もわずかながらいたが、他は何千という死体となって家の戸口や寺院の周辺にできた血の海の中に投げ出されていた。この中には導師や法学者、神秘主義派の苦行僧も多数いたが、彼らは聖地で敬虔な隠遁生活を送るために故国を離れてやってきた人びとであった。最後まで生き残った者には最悪の仕事が与えられる。死体を背負って運び、広い空き地に埋葬もせず、墓もない所にただ山積みにしてから焼き払うのだ。その後で彼らもまた殺されるか、奴隷として売り払われた。……

同宗の信徒といえども容赦されなかった。フランクが最初に手がけた措置のひとつは、東方教会派すなわち、ギリシア、グルジア、アルメニア、コプト、シリアの各教会派の全司祭を聖墳墓教会から追放したことである。これら教会派は古い伝統に従って、そこでいっしょに祭式を執り行っていた。そしてどんな征服者もこれまでその伝統を尊重してきたのであった。あまりの狂信性に肝をつぶし、これら東方教会の指導者たちは抵抗することに決める。彼らは、キリストが架けられた真の十字架を隠してきた場所を占領者に明かすことを拒んだ。彼ら司祭たちにとっては、聖遺物崇拜は郷土愛的な誇りに通じている。事実、彼らはあのナザレびとと同郷人ではないか。しかし、侵略者たちはそういうことに動ずるところか、十字架の守り役の司祭たちをひっ捕らえ、拷問にかけて口を割らせた。こうして彼らは、聖都のキリスト教徒から、最も貴重な聖遺物を強奪することができたのである。

(A) イスラム暦 (イスラーム暦) の元年に起こった出来事は何か？

ヒジュラ (聖遷)

(B) 法学者をアラビア語で何というか？

ウラマー

(C) ムスリムは十字軍 (「フランク」) をどのように捉えたか？

虐殺を好み、ムスリムだけでなく異端であれば同じキリスト教徒にも容赦しない野蛮なけだもの

資料 3-3 (参考文献③ P347~350 の一部)

1187年10月2日、金曜日、イスラム暦では583年ラジャブ月27日。それはムスリムが、エルサレムへの預言者の夜の旅を祝う日である。サラディンは聖地への堂々たる入城を行った。武将や兵士には厳しい命令が出される。フランクであろうが中東の人であろうが、キリスト教徒に対して指を触れてはならぬと。実際に、殺人も略奪も行われなかった。何人かの狂信者たちが、かつてフランクが行った暴虐への報復のしるしとして、聖墳墓教会を破壊すべしと主張したが、サラディンは彼らをたしなめた。それどころか、礼拝所に対する警備を強化し、フランクでも望むときはいつでも巡礼に来ることができると発表した。もちろん、岩のドームの頂上に立っていたフランクの十字架は引き下ろされた。教会に変えられていたアル=アクサーのモスクは、壁に薔薇水をふりまいた後、ムスリムの礼拝所に戻った。……サラディンがエルサレムを征服したのは、財物を集めるためでも、まして復讐のためでもない。彼が特に求めたのは、自身の説明によれば、神と信仰にかかわる義務を遂行することであった。彼の勝利、それは聖地を侵略の束縛から、流血も、破壊も、また憎悪もなく解放したことだ。

資料 3-4 (参考文献③ P313 の一部)

ある時のことだが……、フランクを前にしたスルタンの本陣へ私が馬を乗りつけたとき、1人の斥候が、胸をたたいて嘆き悲しんでいる女を連れてきた。説明していうには、「この女はフランクの側からやって来て、御主君に会わせてくれと申すので、こうして連れて参りました」サラーフッディーン^{*2}が通訳を介して質問すると、答えは次のとおりであった。「ムスリムの泥棒たちがきのうわたくしの幕舎に押し入り、幼い娘を連れ去りました。ゆうべは泣き明かしましたが、朝になると隊長たちが申します。ムスリムの王はなさけ深いおかただ。向こうへ行かせるから、娘のことを王にじきじきお願いしてみろ。そこでわたくしはこうしてお伺いし、あなたさまにおすがりする次第でございます」。心を動かされて、サラーフッディーンの中から涙があふれた。彼は部下を奴隷市場にやって娘を捜させた。すると1時間もたたぬうちに、1人の騎兵がくだんの娘を肩にかついで戻って来た。その姿を見るや、母親は地面に身を投げ、顔を砂まみれにするので、皆もこらえ切れずに泣いた。彼女は空の方をながめ、わけのわからぬことを述べ始めた。こうして娘は返され、彼女は付き添われて、フランクの陣に戻った。

※ サラディンの別名、「宗教の救済」を意味する

(A) サラディンが創始した王朝は何か？

アイユーブ朝

(B) サラディンによる聖地解放はどのように行われたか？

流血・破壊が起らないように慎重に行われ、キリスト教徒の巡礼の自由も保障された。

サラディンはキリスト教徒であっても、同じ人間として丁寧に扱った。

資料 3-5 (参考文献④ P152、156 の一部)

イスラームとキリスト教は同一の伝統上にある兄弟宗教である。どちらもユダヤ教を母胎とし、同じ「神」を崇拝し、同じ系列の聖典を戴き、同一の預言者たちを敬う宗教である。……西欧社会とイスラーム世界との対立が1096年から始まった十字軍運動によって明確になるまでは一般のキリスト教徒にとってイスラーム教徒ムスリムは宗教上の敵ではなかった。同様にムスリムにとってもキリスト教徒は長い年月、同じ地域に住む隣人でもあり、共同体の一員でもあった。……しかし、本来、イスラームでは保護民であったキリスト教徒の襲来によって、多くのムスリムは、近隣に住むキリスト教徒に対してさえも不信感を持つようになり、そのために、コプト教会や正教会などの土着のキリスト教徒やユダヤ教徒が、大量にイスラームに改宗する現象もみられた、……本来、イスラーム治下では保護民であったキリスト教徒が、遠くから十字軍として襲ってきて略奪や虐殺を繰り返したことは、ムスリム側にキリスト教徒に対する不信感や不寛容の意識を増加させるようになり、そのトラウマは現代でも消えていない。

(A) イスラームではキリスト教徒・ユダヤ教徒を何と呼んだか？

啓典の民

(B) 十字軍によってムスリムのキリスト教へのイメージはどう変化したか？

同じ神を戴く兄弟（隣人）から憎むべき敵となり不信が増した。

資料 4 - 1 (参考文献⑤ P85 の一部)

この4歳の孤児は早熟の天才だったのだ。すでにラテン語の読み書きを習得して、歴史や哲学の書物を読みかじっていた。おそろしく頭がよい上に知的好奇心に満ち満ちており、教皇[※]派遣の教師たちの教えることを次から次へと吸収し、歴史、哲学、神学、天文学、数学、植物学をものにし、試作と楽器演奏をも習得した。それにこの子はただの秀才でなく、屋外で遊ぶことも好きで、先生の目を盗んではパレルモの街路に飛び出し、持ち前の好奇心を存分に発揮して、この国際都市の現実から直接に学ぶべきものを学んだ。語学の天才でもあったから、その町で話される各種の言語を会得し、アラビア語やギリシャ語には特に堪能になった。

※教皇インノケンティウス3世、幼くして孤児となったフリードリヒの後見人を務めていた。

資料 4 - 2 (参考文献⑥ P125~126 の一部)

フリードリヒ2世も疫病にかかったが、病を押して、1227年9月8日に800人の騎兵と1万人の歩兵からなる本隊を率いて、聖地に向けてプリンディジ^{※1}を出港した。出向から数日後に、フリードリヒ2世は健康状態が悪化し、引き返し、……アナーニに滞在していた教皇に使者を送り、十字軍遠征の延期を求めた。／教皇グレゴリウス9世はフリードリヒ2世が疫病にかかり戻ったことを、十字軍をやめる口実としたとして、アナーニの大聖堂に集まった司教たちの前で、フリードリヒ2世を破門に付した。……教皇グレゴリウス9世の破門通告は、フリードリヒ2世による約束の反故を非難し、シチリアの「教皇代理権^{※2}」の問題にまで及んだ。教皇グレゴリウス9世は「教皇代理権」の問題を蒸し返し、その権利の放棄を贖罪の条件とした。フリードリヒ2世としては、ノルマン朝のシチリア王国に認められていた「教皇代理権」を放棄することはできなかった。

※1アドリア海に望むイタリア南部の都市、半島の「かかと」に位置する。

※2シチリア島が教皇庁の支配地で、シチリア王はあくまでその代理で統治する権利を持つという考え

資料 4 - 3 (参考文献⑥ P124~125、129 の一部)

フリードリヒ2世の宮廷に、1227年初頭、アイユーブ朝のスルタンのアル・カーミルの使者が訪れた。アル・カーミルの使者は、シチリアとイラク北部を支配し、エジプトへ攻撃しようとしたアル・カーミルの弟アル・アッザムに対抗するために、フリードリヒ2世に支援を求めた。／アル・カーミルは、その見返りとして、フリードリヒ2世にアル・アッザムが支配するイエルサレムの大部分を譲渡する用意のあることを伝えた。……

フリードリヒ2世は、1229年2月18日……ヤッファ[※]でアル・カーミルとの講和協定に調印した。それによって、イエルサレム……がキリスト教徒に返還された。……ムスリムには岩のドーム（ムハンマドが昇天したといわれる聖地）で自由に礼拝することと、イスラーム法のシャリーアにもとづく裁判権が保障された。最後に10年間の休戦が締結された。／破門されていたフリードリヒ2世は、戦いを交えることなく、平和的な方法で、これまでいかなる十字軍も成し遂げられなかった成果をあげた。それは、イスラーム世界についての広範な学識を備えたフリードリヒ2世がアル・カーミルの個人的な信頼を得て、友好関係にあったことが大きい。

※パレスティナの都市、現在はイスラエルの都市テルアビブの一部となっている

資料 5 - 1 (参考文献③ P392~394 の一部)

彼は人がいふほど、ほんとに強力なのだろうか？彼は実際ムスリムに対して聖戦を行おうとしているのだろうか？ 周りのものに尋ね、また、フリードリヒが国王になっている島、シチリアから来た旅行者から聞けば聞けばほど、アル＝カーミルの驚きは増して行く。……彼は有能な外交官である貴族、ファクルッディーン・イブン・アル＝シャイフを長とする使節団を送ることに決めた。／パレルモに着くや、ファクルッディーンは驚嘆してしまった。まこと、フリードリヒについていわれていることは本当なのだ。彼はアラビア語を完全に話し、かつ書き、ムスリム文明に対する称賛を隠さず、野蛮な西洋について、そして特に大ローマの法王^{※1}について、ばかにした態度を示す。彼の側近も、また近衛兵もアラブであり、彼らは礼拝の時間になると、メッカの方に向かってひざまずく。この好奇心旺盛な精神の持ち主は、当時アラブの学問の恵まれた中心だったシチリアで青春を過ご

したので、愚鈍で狂信的な西洋人との一体感などほとんど持っていない。彼の王国では、ムアッズィーン（ムスリムの祈りの際の朗唱係）の声が何の拘束もなく響き渡るのである。／ファクルッディーンはやがてフリードリヒの友人、そして腹心になる。彼を通じて、ドイツ皇帝とカイロのスルタンの関係は緊密化する。2人の君主はアリストテレスの論理学、靈魂の不滅、宇宙の起源などを扱った書簡を交わす。アル＝カーミルは動物観察に対する相手の情熱を知って、熊、猿、ひとこぶラクダおよび一頭の象を贈り、皇帝はそれらを私有の動物園のアラブ人管理人に委ねた。……そこで彼はためらわずフリードリヒに向かい、近い将来東方に来て欲しい希望を表明し、できればエルサレムの所属を協議するために会いたいとつけ加える。／このような底抜けの気前のよさの表明は、この提案が為されたとき、聖地はアル＝カーミルのものではなく、弟のアル＝ムアッザム^{※2}に属しており、2人が仲たがいがいしたばかりということを考えれば、ずっとよく理解できる。……熱心なムスリムなら、これほど冷静に、聖地を放棄することなど断じて考えないだろう。しかしアル＝カーミルは伯父のサラディンとはだいぶ毛色がちがう。彼にとって、エルサレム問題とは何よりもまず政治的・軍事的であって、宗教的側面は世論に影響が出る時だけ考えようという程度なのだ。……フリードリヒは、まず同じ考えである。

※1 かつて使われていたローマ教皇の呼称

※2 資料4-3のアル・アッザムと同一人物

資料5-2 (参考文献⑥ P397の一部)

フランクの王である皇帝がエルサレムを訪れたとき、私はアル＝カーミルの要請により、彼と行動をともにした。いっしょにハラム・アル＝シャリーフ^{※1}に入ると、彼はまず小モスクを一巡する。次いでアル＝アクサーのモスクへ行くと、彼はその建築美をほめ、「岩のドーム」でも同様だった。……その夜、私はムアッズィーンに向かい、皇帝の気分を損なわないよう、祈りの呼びかけをやめてほしいと頼んだ。しかし皇帝は翌朝、私がいざつに赴いたとき尋ねた。「カーディー^{※2}よ、ムアッズィーンはなぜ、いつものように祈りへの呼びかけを行わなかったのか」。私は答えた。「陛下の御為を思い、わたくしがやめさせたのでございます」。皇帝は答えた。「そんなことをするには及ばなかったのだよ。私がエルサレムで一夜を過ごしたのは、とりわけ夜のムアッズィーンの呼びかけを聞きたかったからなのだ」。

※1 「岩のドーム」などがあるイエルサレムの聖域

※2 イスラームの裁判官、この記録を行ったシャムスディーンのこと

参考文献

- ① 『十字軍全史』(新人物往来社編、2011年)
- ② 『世界史探究』(実教出版、2023年)
- ③ 『アラブが見た十字軍』(アミン・マアルーフ(牟田口義郎・新川雅子訳)、筑摩書房、2001年)
- ④ 「十字軍はイスラームに何をもたらしたか」『文藝春秋 SPECIAL2016年冬号』(塩尻和子、2016年)
- ⑤ 『物語イタリアの歴史』(藤沢道郎、中央公論新社1991年)
- ⑥ 『フリードリヒ2世』(藤澤房俊、平凡社、2022年)

まとめと振り返り 【5分】学習課題と振り返りについて説明する。

◆ グループ学習での学びを参考に、学習課題に個人で解答しよう。

(1) 学習課題「現代の我々が十字軍から得られる教訓とは？」に個人で解答する。

予想される解答例（A評価の例）

異なる考えを持つ他者が接するとき、自分の考えを絶対視し相手の考えを否定してはいけない。たとえ敵対する相手に対しても、ことさらに憎悪を増幅させるような取り扱いは、一時的には成果をもたらすかもしれないが、後世にかならず禍根を残す。

そこで、サラディンのように、自分の考えを大事にしつつも、他者への共感や寛容を示すことが必要である。また、フリードリヒ2世とアル＝カーミルのように、異なる価値観に多く触れておき偏見をなくすことや、自分と相手の利益を考えて現実的な交渉・妥協を組み合わせていくことも重要である。

(2) 振り返りを記入しよう。

(a)現時点での十字軍に対するイメージはどのようなものか 1(2)（学習前のイメージ）と比較してみよう。

(b)学習を通して疑問に思ったことや今後考えてみたいことはどんなことか。

(a)

グループ学習を行う中で自分が最初に上げた十字軍のイメージがどのように変化したか、または変化しなかったか振り返りを行う。自分自身との対話やグループ学習中の対話を通して、多様な意見を受け入れていながら学習を進めているかを見取る。

(b)

粘り強く資料の読解や解答作成に取り組み、疑問や課題を見出そうとしているか評価する。

◆ 評価規準

		A	B	C
思考・判断・表現		資料に基づいて、十字軍から得られる教訓を多面的に考察し、現代社会との関連を示して論理的に表現している。	資料に基づいて、十字軍から得られる教訓を考察し、文章で表現している。	資料に基づいて、十字軍から得られる教訓を考察し、文章で表現していない。
主体的に学習に取り組む態度	取組	十字軍の学習において、自分のイメージの変化について自分や他者との関わりの中から振り返りを行っている。	十字軍の学習において、自分のイメージの変化について振り返りを行っている。	十字軍の学習において、自分や他者との対話が十分でない。
	※2 調整	十字軍の学習から、関連する疑問点や次の課題を見いだすなど今後への見通しをもっている。	十字軍について疑問点を挙げるなど今後の学習への見通しをもっている。	十字軍について疑問点をもてず、見通しが曖昧である。

※2 粘り強い取組を行おうとしている側面、自らの学習を調整しようとする側面の評価